

菱川師宣記念館蔵『歌仙』——解題と翻刻・影印——

田野 慎 二

*キーワード

菱川師宣・名所和歌・名所絵・歌仙絵

はじめに

菱川師宣記念館に『歌仙』という作品が所蔵されている。同館発行『菱川師宣作品集』¹⁾で「刊年・版元とも不詳だが、師宣画と思われる」と紹介される刊本だが、わずかな掲載図版では、その全容を把握することが叶わなかった。

この度、实地に調査させていただいたところ、挿絵には、確かに師宣風の雰囲気があり、師宣作品として確実な、『百人一首像讀抄』『女歌仙新抄』『藤川和歌百首』の挿絵などと比較してもそれほど遜色ないようである。本稿は、絵入りの名所歌集とでも言うべき本作品を、簡単な解題とともに、影印、翻刻紹介しようとするものである。

一 書誌

先ず、書誌を報告する。

菱川師宣記念館蔵。整理番号A-7-1(2)。刊本、二冊。表紙は藍色草花横刷毛目。その中央に、外題あり。題簽に「歌仙^{菱川師宣画} 上(下)」と墨書。題簽は後装か。内題なし。縦二六・一糎×横一八・三糎。短辺の匡郭で、序部分は、縦二一・九糎×横一五・八糎。その他は、一七・六糎×一五・七糎。表紙以外の紙数は、上冊十三丁、下冊十四丁。丁付けなし。

上冊巻頭に序あり。年時・署名なし。序の前半は、『古今和歌集』『仮名序』巻頭を踏まえ、和歌の本質・効用を述べる。後半は刊行の趣旨を記す。その内容は、専門の歌人と違い、「その所の風景をめなれぬ人」は、名所の情景を想起することが難しいので、名所の「あらまし」(＝大体のところ)を絵に描き、歌人と名歌を添えて刊行するのだというものである。ところで、刊行趣旨のくだりに、「ゐながら名所をしる」という当時の俚諺が引用されている。これと同じ俚諺が、師宣が挿絵を描いた、天和二(一六八二)年刊『名所和歌之道引』や『和国名所鑑』の序文でも、それぞれ、

されば、聖人は生ながらしく、哥人は居ながらにして名所をし
るとこそいへ、蒙昧の我らごときは、更に十方なし。

〔名所和歌之道引〕

誠に海陸の風破にも不逢して目前にこれをうかごふ事、哥人は居な
がら名所を知る心ならんか。

〔和国名所鑑〕

と引用されており、名所の情景を視覚的に伝える挿絵を付した作品では、
常套的に使用される諺であった。この俚諺は、「歌人というのは日頃から
名所・歌枕の知識を蓄えていて、よしんば実際に訪れたことのない名所
であっても、いつでもすぐにその情景を想起し得るものだ」という意味
で、そのようなことの難しい人のために、名所の情報を視覚的に図示す
ることが本書刊行の狙いであったようだ。

二 集付・和歌

各挿絵で引用される和歌の集付はすべて勅撰集である。〔表1〕に示
たとおり、集付の記載は概ね正しいが、「15 新古今」↓新統古今、「43
続後拾遺」↓新後拾遺のような誤りもある。この二例を訂正した形で、
引用歌の出典数を勅撰集毎に整理すると、以下のようになる。

古今	1
後撰	2
拾遺	1
後拾遺	0
金葉	2
詞花	0
千載	4
新古今	7
新勅撰	5
続後撰	2
続古今	3
続拾遺	1
新後撰	2
玉葉	2
続千載	1
続後拾	2
風雅	1
新千載	2
新拾遺	3
新後拾	3
新続古	8

『後拾遺集』『詞花集』を出典とする和歌はないのだが、おおむね、二
十一代集全体が選歌の対象になっていたことが確認できる。

ただし、いくつか気になる点がある。『古今集』を出典とする和歌がわ
ずか一例しかない点、『新統古今集』が、『新古今集』よりも多い八例で
最多となっている点、八代集十七例、十三代集三十五例で、後者の方が
優遇されているような印象を受ける点などである。

直接の選歌資料が何であったかはまだ分からない。当該歌が、『新編国
歌大観』で他にどのような作品に収録されているかを確認したところ、
『歌枕名寄』が三十六例と最多であった。名所歌集である『歌枕名寄』
は、「採録歌の出典として名が見える勅撰集が、若干の例外を除き続拾遺
和歌集（静嘉堂本）もしくは新後撰和歌集（刊本など）を下限と」して
いるため、この数値にとどまったのであろうが、このような名所歌集の
類いが選歌資料になった可能性はあろう。勅撰二十一代集から諸国の名
所を詠んだ和歌を集めた『類字名所和歌集』には、『歌仙』掲載歌はすべ
て収録されている。

勅撰集所収の当該名所歌が少ないのならともかく、ある程度の歌数が
ある場合は、なぜその歌が選ばれたのか、その理由を合理的に説明する
ことはなかなか難しい。

たとえば、「6 浮田杜」について、『類字名所和歌集』は、次の十首
を挙げる（四三二五〜四三三四）。

あふ事のなきを浮田の杜に住よぶこ鳥こそ我身也けれ

（金葉恋上 藤原為真朝臣）

下草は葉ずゑばかりになりけりうき田の杜の五月雨の比

(統後撰夏 俊成)

かくしつゝさてやゝみなん大あらしの浮田の杜のしめならなくに

(統古今恋一 人丸)

春くれば浮田の杜に引しめや苗代水のたよりなるらん

(統拾遺春下 従二位家隆)

行雲の浮田の杜のむら時雨すぎぬとみれば紅葉してけり

(新後撰秋下 源兼氏)

下草は植ぬに茂る大あらしの森のうき田にさ苗取なり

(統千載夏 津守国道)

心引方こそしらねわするゝ身をば浮田の森のしめ繩(同恋五 法眼行濟)

★日にそへて思ひぞ茂る大あらしの浮田の杜や我身なるらん

(新千載恋三 八条院高倉)

大あらしの杜の浮田の五月雨に袖ほしあへずさ苗取也

(新拾遺夏 藤原雅朝朝臣)

五月雨はまやの軒ばも朽ぬべしさこそ浮田の杜のしめ繩

(新統古今夏 順徳院御製)

『歌仙』で収録されたのは、★の八条院高倉歌なのであるが、俊成・人丸・家隆・順徳院らの歌ではなく、なぜこの八条院高倉歌が選歌されたのか、よく分からないのである。選歌にあたってはいろいろな方針があり、厳しい制約に縛られてもいたであろうが、今のところ、特定の選歌資料に拠った可能性を考えている。

また、序文では「名哥をそのほとりにかきあらはしぬ」と、掲載歌すべてがあたかも「名歌」であるかのように記されているが、この点も文字通りには受け取りにくい。「名歌」の定義にも拠るだろうが、『歌仙』の場合、勅撰集所収歌ということで、「名歌」であることの担保とされているのではないか。

三 所在国・名所

名所の所在国を、全国を五畿七道に分ける分類で整理すると、以下のようになる。

畿内 山城⑮ (1 笠取山、2 千代古道、6 浮田杜、16 小倉山、

23 桂里、26 石清水、28 音羽瀧、31 戸難瀧瀧、

33 野宮、38 稲荷山、40 淀、41 款冬瀧、44 鳥羽、

46 嵐山、49 小野)

大和④ (3 春日野、8 葛城山、25 初瀬寺、35 龍田)

摂津③ (18 輪田御崎、27 生田森、37 布引の瀧)

伊勢③ (15 若松原、30 神路山、39 鈴鹿)

参川① (42 八橋)

遠江② (10 浜名橋、21 佐夜中山)

駿河② (13 富士、36 田子浦)

常陸① (22 桜川)

東山道 近江⑧ (7 湖海、9 石山寺、17 堅田、20 千枝村、

29 竹生嶋、34 老曾杜、43 唐崎、47 逢坂)

美濃① (14 不破関)

陸奥① (50 千賀塩竈)

北陸道 ナシ

山陰道 丹後③ (4 梶嶋、24 懸湊、48 天橋立)

山陽道 播磨② (5 室泊、45 賀古湊)

備後① (19 鞆浦)

南海道 紀伊② (11 音無瀧、12 和哥浦)

淡路① (51 絵嶋)

西海道 筑前① (32 生松原)

豊前① (52 門司関)

これは、おおむね、各国の名所数と関係しているようで、『類字名所和歌集』で、名所数十以上の国は、越中国・石見国・備中国・信濃国を除いて選ばれている。それにしても、山城国の十五カ所はおよそ三割で、群を抜いて多く、都近辺の名所への関心の高さを物語る。逆に、都から遠く離れた地で、床しい歌枕も多い陸奥国は一方所と少ない。畿内を除く地域でも、伊勢国・近江国・丹後国・播磨国・紀伊国・淡路国など畿内に近いところの名所が目立つ。

一方、たとえば、大和国では、吉野がなく、摂津国では、須磨、明石、住吉が選ばれていない、といった点、逆に、勅撰集では、1〜2例しか用例のない、4 梶嶋、5 室の泊、18 輪田御崎、19 鞆浦、22 桜川、24 懸湊 41 款冬瀬(以上1例) 20 千枝村、29 竹生嶋(以上2例)が選ばれ

ている点など、名所選択の基準がどこにあるのかは判然としない。この点は、前節で触れた選歌資料とも関わるだろう。今後さらに検討を加えたい。

四 歌人

掲載歌には、「読人不知」の和歌がないことが大きな特徴である。序文でも「よみ人のかずをならべて」と記されており、特定の個人が詠んだ歌が選歌の対象であったようだ(表2)参照。

しかも、41 西園寺入道と52 入道前太政大臣とが、同じ藤原(西園寺)公経であることを除けば、一人が重複して選歌されることも避けられている。公経の場合も、あるいは、編者は、別人と捉えていたのかもしれない。とすれば、『歌仙』では、選歌において、勅撰集所収の名所和歌で、読人不知の歌は除き、選歌は一人一首に限るという原則があったと推定されるのである。

この原則は、たとえば、『百人一首』(藤原定家の選歌方針にも通じる)ところがあり、それは『歌仙』という書名にも関わるものだが、掲載歌の歌人を一覧すると、歌仙(「和歌に優れた人」とするにはやや躊躇せざるを得ない歌人も含まれている。【表2】には、当該歌人が、主要な秀歌撰に選ばれているかどうかを参考として示した。⁶⁾

『歌仙』の歌人を一覧すると、柿本人丸はいるが、山部赤人はおらず、六歌仙では、在原業平のみ。三十六歌仙では、柿本人丸、紀貫之、在原

業平、源順のみ。中古三十六歌仙では、赤染衛門、在原元方、藤原長能のみ。女性歌人という点でも、小野小町、伊勢、和泉式部、式子内親王といったビッグネームがない。このように、古い時代の代表的な歌仙が少なく、全体に華やかさに欠ける点は否めない。

試みに、勅撰集入集歌で、和歌の力量を測るとするならば、総入集歌数の少ない、たとえば、十首に満たない歌人が、十二名含まれている点も注意される。さまざまな制約の下、やむを得なかつた面もあるうが、この問題も、『歌仙』における選歌の方針や選歌資料の問題とも関わるので、今後の課題とする。

いすれにせよ、「歌仙」という書名は、掲載歌の歌人の顔ぶれからするとやや誇張されたきらいはあるのだが、一方、歌仙絵という観点から見れば、本作品の特徴を端的に表しているとも言える。それは、挿絵の手前の方に、名所の風景だけでなく、作者と思しき歌人の姿が、大きく歌仙絵として描かれているケースが37例ほどあるからである。特に、16業平、22貫之、35人丸については、それぞれに特有の伝統的な歌仙絵の姿で描かれていることが確認される。⁸⁾つまり、『歌仙』の挿絵は、名所絵と歌仙絵との融合が志向されているところに特徴があると考えられまいか。

五 頭注

頭書部分に付されている、掲載歌に対する簡略な注釈については、今

これを詳細に検討する余裕はないが、その性格の一端として、短い注の中に、和歌や漢詩などを引く例が目立つ点を取り上げてみたい。煩をいとわず列挙し、出典を注記すると以下のとおりである。

9 白楽天が、三五夜中の新月色、二千里外故人心とおなじ。

三五夜中新月色 二千里外故人心

(和漢朗詠集・十五夜・白楽天・二四二)

11 いくたびか心までくるわがなみだかなと同じ。

未詳。参考「ゆるさねは袖にはおちずいく度か心までくるわがな

みだかな」(新明題和歌集・忍涙恋・後水尾院・三一六八)

18 人丸の、あかしのうらのしまがくれゆく舟もかくこそあらめと、ゑならぬおもひをもよふせり。

ほのほのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ

(古今集・羈旅・詠人不知(柿本人麿)・四〇九)

23 しものたてつゆのぬぎの心ちし侍り。

霜のたてつゆのぬぎこそよわからし山の錦のおればかつちる

(古今集・秋下・藤原関雄・二九一)

29 木ずへ庭二たび花のさかり哉とよみしごとく、ちくぶじまのけい、水うみのけい、いふもおろかなり。

未詳。参考「雪ふりてところもわかずさく花は木ずゑも庭もさか

りなりけり」(文治六年女御入内和歌・雪・三条実房・二七五)

38 तरीもせずくもりもはてぬはるのよのおぼる月よにしく物はなしと同

じ也けり。

てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおほろ月よにしく物ぞなき

(新古今集・春上・大江千里・五五)

43 さざ波やしがの都はあれにしをむかしながらのやまざくらかなと同じ。

さざ浪やしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな

(千載集・春上・読人不知・六六)

46 いかだしよまでこととはんとよみしに、此ころなるべし。

いかだしよ待てこと問はん水上はいかばかりふく山のあらしぞ

(新古今集・冬・藤原資宗・五五四)

48 つみなくしてはい所の月をみんにはといひしも、このころなるべし。

「あはれ罪無くして配所の月を見ばや」(古事談・巻第一―四七、

源中納言顕基の言葉、岩波新大系、「もとよりつみなくして配所

の月を見ん」(平家物語・巻第三・大臣流罪、岩波文庫)

50 思ふともきみはしらじなわきかへり岩もる水の色しみえねばと心ちこなじ。

思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば

(源氏物語・胡蝶 柏木 三六六)

出典未詳のものもあるが、おおむね、読者にとつて既知の、著名な和歌・漢詩文などを引いて、当該歌の心がそれと同じだということ述べ、注である。この方法自体はそう珍しいものでもないが、ここでは、当該歌に、有名な和歌や漢詩文などに通じるものがあることを殊更に示すことに意味があるのではないか。ここに、当該歌の価値を高める、すなわち「名歌」であることを示そうという意図を読み取りたいと思うの

である。

おわりに

以上、菱川師宣記念館蔵『歌仙』の書誌および内容について報告させていただいた。課題も多く、たいへん複雑な報告になってしまったが、本作品は、絵入りの名所歌集として、その内容が広く共有されるべきであると考へ、ここに影印・翻刻紹介させていただいた次第である。

掲載歌の選歌資料や頭注の性格だけでなく、名所絵や歌仙絵としての特徴などを、今後の課題として考へたい。他の伝本の存在や選歌資料のことなどご教示賜れば幸いである。

30	新古今 1878	西行家 602③かひありて、御藻灌 2、西行文 92、西行阿 36③ちかひにて、御裳集 6、歌枕名 4548	2147
31	新後拾 452	ナシ	907
32	新古今 868⑤風なわすれそ	続詞花 676⑤風な忘れそ、栄花 119⑤風な忘れそ、今鏡 43⑤風な忘れそ、歌枕名 9019⑤風な忘れそ、源氏注 588⑤かぜにわすれば	594⑤風な忘れそ
33	新古今 1576③ううる花④しぐるる月に	順集 2573③ううる花④時雨るる月に⑤あすはなるとも、六華集 877④時雨るる月に⑤あはずなるとも、歌枕名 521	4496
34	新統古 1767	兼好 282、題林愚 5095	4812
35	新後拾 873	夫木 8382⑤松のみどりか、人丸 238⑤松のみどりか、雲葉集 950	2967
36	新古今 1610③たごの浦、⑤たきすさむらん	正治後 976、女房合 40、歌枕名 5262	3144
37	続古今 239	洞院百 459、歌枕名 4176	1085
38	風雅 1779	歌枕名 1316	16
39	金葉二 540、金葉三 533	歌枕名 4604	8720
40	新統古 293	ナシ	2399
41	新拾遺 182	道五十 244、歌枕名 399	4299・5045
42	新統古 978	ナシ	5069
43	新後拾 1524	ナシ	2232
44	続後撰 393	万代 1121、夫木 14583、月十首 70 判詞、最勝四 241、歌枕名 1061	874
45	新統古 1781	津守集 291	2326
46	千載 370	林葉 591②紅葉こきおろす、定家八 481、歌枕名 683	4577・5834
47	新拾遺 775	ナシ	6366
48	金葉三 515、千載 504②なくてぞみまし	玄玄 137、続詞花 729②なくてぞみまし歌枕名 7731、7760	2804・6548⑤都なりとも
49	金葉二 290④ゆきげのくもに、金葉三 291	堀河百 1081、題林愚 5997、歌枕名 450	1255
50	続後撰 812	古六帖 1797、歌枕名 7277	1053・8020
51	新勅撰 1364	歌枕名 4193、8777	7474・8122
52	新勅撰 1325	六華集 1674、歌枕名 8278	8314

* 歌番号は『新編国歌大観』に拠る。

* 『類字名所和歌集』は、村田秋男編『類字名所和歌集 本文篇』、笠間書院 昭 56)、千艘秋男・谷地快一編『類字名所和歌集索引』(笠間書院 昭 63)を用いた。歌番号は同書に拠る。

* 異同がある場合は、句毎に示した。初句に異同がある場合「①——」。

【表1】『歌仙』掲出歌の勅撰集の出典・他書一覧

	勅撰集の出典	他書	
		『新編国歌大観』所収作品	類字名所和歌集
1	古今 261	五代枕 35、歌枕名 258	1727
2	新古今 1646	拾遺愚 2281、定家十 103、三五記 63、歌枕名 500、6700	1036・6690・8290①さかの山の
3	新勅撰 557	建保合 100、新三撰 176、歌枕名 1727	1834
4	続古今 1655	万葉 1729⑤しきてしそおもふ、古六帖 2060③かはしまの④いそすなみの⑤しきておもほゆ、夫木 10461⑤しきて思へば、五代枕 1498⑤しきてしぞおもふ、歌枕名 7795	2320
5	新拾遺 839③朝あらしに	歌枕名 8011	4213
6	新千載 1308④うきたの杜や	万代 3137④うきたのもりや、歌枕名 1546④うき田のもりや	4332、4723 (ともに④浮田の杜や)
7	新後撰 33①にほの海や	為家 39①にほの海や、白七百 10①にほの海や②渡るも遠き、歌枕名 5863①にほの海や	784①湖の海や
8	続後拾 119	建保百 65	2012
9	新古今 1514	歌枕名 6289	380
10	新勅撰 1293	名所月 62、歌枕名 5038	744
11	新千載 1131	法性寺為信集 291④せくやなみだも	1401
12	新古今 1603	玄玉 733、寂蓮 89、303、三百六 590、歌枕名 8317	1441
13	続古今 884	歌枕名 5173	5579
14	千載 540	歌枕名 6518	5661④夢をもことと
15	新続古 716	題林愚 5939	1416
16	後撰 1231	業平 64、和歌初 177、五代枕 4、歌枕名 543、712	1180・4562
17	新続古 1115	ナシ	2277
18	玉葉 2089	夫木 12112、嘉元百 387、歌枕名 4376	1411・4121
19	新勅撰 1323	万葉 447③みむごとに⑤わすられめやも、夫木 11419⑤わすられむかも、11421 左、五代枕 1068⑤わすられんや、歌枕名 1068	1014
20	玉葉 1102	夫木 14830、歌枕名 6458、大嘗会 95	1047
21	千載 502	続詞花 305④初雪ふれり、和一字 544④初雪ふれり、題林愚 5851、歌枕名 5001⑤かげさえて	6806
22	後撰 107④花の浪こそ	井蛙 474、五代枕 1372、歌枕名 5670	6854④花の浪こそ
23	続千載 479	ナシ	1775
24	新続古今 1775④いづくかかげの	津守和歌集 290④いづくかかげの、作者、国豊、題林愚 5193④いづくかかげの	2321
25	新続古今 2011	ナシ	731
26	続拾遺 1415	長方 85、歌枕名 995	41
27	続後拾 296	夫木 9993、明日香 978	229
28	新後撰 788	六百番 631、題林愚 6397 恋部、歌枕名 248	1130
29	拾遺 203、拾遺抄 125、金葉三 247⑤にしきとや見ん	後十五 26①水のうへに、俊頼髓脳 118、六華集 894⑤錦をぞ見る、後崇合 14 判、歌枕名 5849・6432	1048④いたばり廣き

【表2】『歌仙』掲出歌歌人の初出勅撰集、勅撰入集歌数、主な秀歌撰採録状況(9)

	歌人名	初出 勅撰集	勅撰集 入集歌	主な秀歌撰採録状況												
				①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪		
1	在原元方	古今	33		○							○				
2	定家	千載	460			○	○	○		○	○					
3	僧正行意	新勅撰	28					○						○		
4	式部郷宇合	新古今	3												○	
5	大江茂重	新勅撰	10													
6	八条院高倉	新古今	42				○	○				○	○	○		
7	為家	新勅撰	333			○		○	○					○	○	
8	俊成女	新古今	116			○	○	○				○	○	○		
9	長能	拾遺	57		○							○			○	
10	藤原光俊(真観)	新勅撰	100					○	○					○	○	
11	従三位為信	統拾遺	28													
12	寂蓮	千載	116			○	○			○	○					
13	前大納言資季	新勅撰	37						○							
14	大中臣親守	千載	1													
15	藤原雅永(飛鳥井)	新統古	8													
16	業平	古今	88	○						○	○					
17	前大僧正道玄	統古今	59													
18	入道前太政大臣(西園寺実兼)	統拾遺	209													
19	大伴 旅人	拾遺	14											○	○	
20	前中納言俊光	新勅撰	33													
21	八条前太政大臣(藤原実行)	金葉	13													
22	貫之	古今	452	○						○	○					
23	権中納言公雄	統古今	110													
24	津守国量	新千載	12													
25	権大納言通守	新統古	1													
26	権中納言長方	千載	41											○		
27	雅経(飛鳥井)	新古今	134			○	○	○		○	○					
28	有家	千載	68			○	○	○		○					○	
29	法橋観教	拾遺	3													
30	西行法師	詞花	266			○	○			○	○					
31	儀同三司(勘解由小路・広橋兼綱)	新千載	6													
32	枇杷皇太后宮	新古今	8													
33	源順	拾遺	51	○								○				○
34	兼好法師	統千載	18													
35	柿本人丸	古今	254	○						○	○					
36	越前	新古今	26										○			
37	従三位行能	新古今	49											○	○	
38	源三位頼政	詞花	61				○							○	○	
39	六条右大臣北方(顕房室)	後拾遺	6													
40	左近中将定親	新統古	3													
41	西園寺入道(西園寺公経)	新古今	114				○	○	○		○			○		
42	堀川院中宮上総	金葉	15													
43	法眼玄全	新後拾	1													
44	後鳥羽院	新古今	254				○	○	○		○	○				
45	津守国豊	新統古	1													
46	俊恵法師	詞花	84			○					○	○				
47	有忠	玉葉	17													
48	赤染右門(赤染衛門)	拾遺	97		○						○	○	○			
49	皇后宮権大夫(師時)	金葉	20									○				
50	山口女王	新古今	4													
51	後徳大寺左大臣(徳大寺実定)	千載	78				○	○			○	○				
52	入道前太政大臣(西園寺公経)	新古今	114				○	○	○		○				○	

『歌仙部類』に収録され、これらに収録される歌人が代表的な歌仙と先ずはイメージされたであろう。⁽¹⁰⁾

秀歌選：①三十六歌仙(藤原公任)、②中古三十六歌仙(藤原範兼)、③新三十六歌仙(嘉禎元1235年頃、未詳)、④中古三十六歌仙(寛元四1246年以降、未詳)、⑤新三十六人撰(正元二1260年、未詳)、⑥三十六人大歌合(弘長二1262年、藤原基家)、⑦百人一首(藤原定家)、⑧時代不同歌合(後鳥羽院)、⑨女房三十六人歌合(弘安元1278年以前、未詳)、⑩新時代不同歌合(弘安三1280年以前、藤原基家)、⑪新百人一首(文明十五1483年成立、足利義尚撰)。このうち、①③④⑨は寛文元(一六六一)年に刊行された「歌仙七首」(林和泉掾、

〔注〕

(1) 菱川師宣三百年顕彰祭・菱川師宣記念館開館十周年記念、菱川師宣記念館編集・発行、平7。他に、『菱川師宣記念館図録「総集編」』(昭63)には、見開き二丁分の図版が掲載される。作品解説なし。

(2) 佐佐木幸綱編著『短歌名言辞典』(東京書籍 平9)「歌人はるながら名所を知る」(川平ひとし執筆)参照。同書では、正保二(一六四五)年刊、松江重頼編『毛吹草』(巻二・世話付古語)を典とする。

(3) 『新編国歌大観』「歌枕名寄解題」参照。

(4) 『類字名所和歌集』の刊本には、「古活字版は元和三1617年刊、製版本は寛永八1631年刊(承応二1653年刊本・寛文八1668年刊本・無刊記本もある)」のようなものがある(『和歌文学大辞典』古典ライブラリー 平26、佐藤勝明執筆)。

(5) 『類字名所和歌集』は、村田秋男編『類字名所和歌集 本文篇』、笠間書院 昭56)に拠る。以降、『類字名所和歌集』の引用は同書に拠る。

(6) 寛文元(一六六一)年に刊行された「歌仙七首」(林和泉掾)や『歌仙部類』には、「三十六歌仙」(藤原公任)、『中古三十六人歌合』、『新撰歌仙』、『女房三十六人歌合』、『釈教歌仙』が含まれている。「歌仙七首」については、『江戸の歌仙絵』(国文学研究資料館 平21) 84頁に、詳しい解説(深谷大執筆)がある。

(7) 判断の分かれるものもあるが、1、3、5、8、9、10、11、12、14、15、16、17、18、19、21、22、24、25、26、27、29、30、

31、33、34、35、37、39、40、41、42、43、45、48、49、51、52を想定している。

(8) 人丸は、たとえば、京都国立博物館蔵伝藤原信実筆柿本人丸像などに見られる、脇息に片肘をつけて思案する風情で斜め上を見上げる歌仙絵が有名。業平は、弓を持ち、胡籜を背負った武人姿で描かれることが多い。たとえば、師宣の『百人一首像讚抄』など。貫之は、立てた笏の上部に手を添えて持ち、そこに顎をつけて思案しながら俯くような姿で描かれることが多い。これも、師宣の『百人一首像讚抄』など。

(9) 初出勅撰集と勅撰集入集歌数は、『和歌文学大辞典』(明治書院 昭37)所収の「勅撰作者部類」に拠った。ただし、入集歌数は、異本・重出など、数え方に拠って若干の誤差が出る。概数として示した。

(10) 有吉保編『歌仙三十六歌仙五種類』(勉誠社) 参照。

〔付記〕資料の閲覧・撮影に際し、菱川師宣記念館関係者の方々にたいへんお世話になりました。翻刻・影印掲載につきましてもご高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

翻刻凡例

- 1 菱川師宣記念館蔵『歌仙』(A-7-1(2))を翻刻する。
- 1、翻刻に際しては、底本に忠実であることを心がけたが、次のような方針に従った。
 - 1 原本の変体仮名はすべて現行の字体に改めた。
 - 2 漢字については、できるだけ原本の字体を尊重した。
 - 3 読み易さを考慮して、濁点・半濁点と句読点を施した。底本の振り仮名は煩雑さを避けるために翻刻しなかった。
 - 4 フドリ字は、「々」(漢字)、「ゝ」(平仮名)に統一したが、「くく」はそのままとした。
 - 5 集付、国名、名所名、歌人名を一行でレイアウトし、和歌も改行や散らし等は再現せず、一行でレイアウトした。
 - 6 虫損や滲み・掠れなどで判読不可能な場合は□で示した。その際推定される文字を、右に丸括弧で傍記したことがある。
 - 7 丁の替わり目を「」で記し、その後、丸括弧で丁のオモテ・ウラを示した。
 - 8 便宜上、初めに算用数字で番号を付した。

それと哥哥は、我日の本の風俗にして、めにみえぬ鬼神もかんをなし、武士のこゝろやわらげ、夫婦のなさけしとかや。人めまねなる山がつつしづの男、しづの女も、こゝろをたねとして言葉の花いろかにそみ、水にあそぶかわづ、木ずゑにやどるうぐるすまで、いづれゑにしはしるぞ

かし。いにしへ今のこと、哥のさま、はまのまさこのかずつもり、ゐながら名所をしようとなんあんめれど、その所の風景をめなれぬ人は、さだかならぬ夢のうちにつゝをかたのごとくならんと、おろかなる身のゆきつ(上1オ)かへりつめ□れしあらましをゑにうつして、よみ人のかずをならべて名哥をそのほとりにかきあらはしぬ。みん人、めをよろこばしめ、こゝろをとをくゆかしむるのあしだてともならんかしと、そのひとつのはしをかきしるし侍りぬ。(上1ウ)

1 古今集 山城 笠取山 在原元方

雨ふれど露ももらじをかさとりの山はいかでもみぢそめけん

なにをはゞかさとり山は、一てきの露にもぬれまじきに、もみぢしける事のふしぎさよとなり。これもしゆつくわいのうたなるべし。(上2オ)

2 新古今 山城 千代古道 定家

さかの山ちよの古みちあとゝめてまた露分る望月の駒

いにしへ、こがうのおはします所をたづねしみちなれば、いままたわけとをるわれにも、いにしへをわすれずはおもふかたへあわせめてたべといはぬばかり也。(上2ウ)

3 新勅撰 大和 春日野 僧正行意

かすが山やまたかからし秋ぎりの上にぞ鹿のこゑはきこゆる

かすが山にきりのかかりたる折しも、しかの音をきゝたれば、秋ぎりの上にきこゆるとなり。きりの上にきゝなしたる事めづらし。(上3オ)

4 続古今 丹後 梶嶋 式部卿宇合

あかつきの夢に見えつゝかぢ嶋の岩こす波のくだけてぞおもふ

かぢ嶋の岩こす波はかず／＼にくだくるなり。そのごとく、わが

あかつきの夢にさへおもふ事のかず／＼となり。」(上3ウ)

5 新拾遺 播磨 室泊 大江茂重

友さそふ室の泊の朝風にこゑをほにあげていづる舟人

むろのとまりの舟よそふひは、こゑにつれてほをかくるなり。さ
るによつて、風のぜんあくもしらねども、人なみに舟をいだすと

なり。こゑをほにあげてとよみし作意ゑにしあり。」(上4才)

6 新千載 山城 浮田杜 八条院高倉

日にそへておもひぞしげる大あらきのうきたのもりは我身なるらん

我こひの、日にそへてふかくなりぬれば、此うきたのもりにすみ
なれし人も、我身のごとくうき事しげきによりて、かくなをばつ

げやらむとなり。」(上4ウ)

7 新後撰 近江 湖海 為家

みづうみややすみてくるゝ春の日にわたるもとをしせたの長橋

みづうみのけい、せたのはしよりながめいたれば、ながき日もか
すみのうちにくれけるを、はしのながきにくれけるとなり。けう

にせうじたるありさま、さもありなん。」(上5才)

8 続後拾 大和 葛城山 俊成女

岑高き雲にさくらの花やちる嵐ぞかほるかづらきのやま

かつらぎのみねたかきほどに、くもにさくらの花ちるやうにみゆ

ると也。さあるほどに、あらしのかほるやうにおぼゆると也。花

にめでしこゝろいとおもしろし。」(上5ウ)

9 新古今 近江 石山寺 藤原長能

都にも人や待らん石山のみねにのこれる秋の夜の月

石山の秋の月にみやこのともをおもひいでたれば、ひたすら月の
けうにさそはれてなつかしきに、みやこのともも、わが思ふやう

にわれをまつらんとなり。白樂天が、三五夜中の新月色、二千里
外故人心とおなじ。」(上6才)

10 新勅撰 遠江 浜名橋 藤原光俊

すみわたる光もきよし白妙のはまなのはしの秋の夜の月

秋の月はいづこもおなじながめなれども、とりわけ、はまなのは
しにてながむれば、なべてのけうあり。さる程に、しろたへのと
はきこへ侍り。」(上6ウ)

11 新千載集 紀伊 音無瀧 従三位為信

人しれぬ心のうちの水上にせくやなみだのおとなしの瀧

おもひあまりて、心のうちのかなしさはいふもおろかなり。され
ども、人めをしのぶこひぢなれば、人はしらじとぞ。そではみ
えず、いくたびか心までくるわがなみだかなと同じ。」(上7才)

12 新古今 紀伊 和哥浦 寂蓮

わかぬ浦を松の葉ごしにながむれば木末によするあまのつり舟

わかぬうらをとをくよりみわたせば、木ずゑになみのよせくるや
うにみゆるとなり。□□□□うらも□末も名所なり。□□によすゑ

り。□□□□おもしろし。」(上7ウ)

13 続古今 駿河 富士 前大納言資季

みやこをば山のいくへにへだてきてふじのすそ野の月をみるらん

みやこよりはる／＼くんだりしみちすがら、ものうきなか／＼いふ
もおろかなるが、今ふじのすその、月をながめて、あきのものう
きをわすれたるとなり。かくのごときのゑにしならんと、かねて
しらぬはかなさよと也。」(上8オ)

14 千載集 美濃 不破関 大中臣親守

覆もるふわのせきやにたびねして夢をもゑこそとをさざりけれ

旅ねのものうきに、あられのをとにゆめをだにみはてぬとなり。
ふわのせきやまばらなるに、あられのをとのしげければ、おもひ
やられてさもあらんかし。」(上8ウ)

15 新古今 伊勢 若松原 藤原雅永

雪ふればわか松原うづもれてしほひのたづのこゑぞさむけき

わかまつばらは、よにもまれなる松原なり。されども、ゆきの
ふりつみたれば、そのけいも見わかぬなり。さある程に、こゝろ
なきたづのなきわたるもさむけきと也。賀の哥なれば、ゆきも松
もたづも、いく世も／＼かわらぬとなぞらへたるなり。」(上9オ)

16 後撰集 山城 小倉山 業平

大井川うかべる舟のかざり火に小倉の山もなのみなりけり

おぐら山は、さがの名所也。されども、今、大井川に舟をうかめ
てなつ山のしげりあふたるふうぜいは、まさりておもしろきほど

に、なのみなりと也。いにしへより今は一しほおもしろしといは
んばかり也。」(上9ウ)

17 新続古今 近江 堅田 前大僧正道玄

さざ浪やよるべもしらず成にけりあふはかただのあまのすて舟

さざ浪とは、よるべといはんまくらことばなり。わがあひみし人
はいづちにかおはすらん。なつかしさのあまりにそのかみながめ
やりしかたのうらみれば、あまのすて舟は、いにしへにかは
らぬとふかくなげきたり。」(上10オ)

18 玉葉集 摂津 輪田御崎 入道前太政大臣

夕附日わだのみさきをこぐ舟のかたほに引やむこの浦かぜ

せきやうのじぶん、わだのみさきをこぐふねをながめやれば、ゑ
んほのきはん、ごんごだうだんのけいきなり。人丸の、あかしの
うらのしまがくれゆく舟もかくこそあらめと、ゑならぬおもひを
もよふせり。」(上10ウ)

19 新勅撰 備後 鞆浦 大納言旅人

とものうらの磯のむろの木みる毎にあひみしいもはわすられんやは

とものうらにてちぎりしひとよ、つまの事、今みるむろの木を、
とものむろの木にみなしたり。たゞの一よのちぎりもいかでおろ
かならんや。いとたのもし。」(上11オ)

20 玉葉集 近江 千枝村 前中納言俊光

うすくこくちえだにさける藤なみのさかりも久し万代の春

うすくこくとは、ちえだのはな成□にさもあらん。さあるほどに、

さかりも久しからんとなり。賀の哥なるほどに、千枝といひ、万代といひ、かわらぬためしなるべし。」(上11ウ)

21 千載集 遠江 佐夜中山 八条前太政大臣

夜な／＼のたびねの床にかせさへてはつ雪ふれるさやの中山

旅行のものうさおもひやられて、うきのみなるに、ことにこよひははつゆきのふれゝば、やるかたもなくかなしきとなり。またこゆべきもしらねば、一かたならぬおもひとなり。さもあらんかし。」(上12オ)

(上12オ)

22 後撰集 常陸 桜川 貫之

つねよりも春辺になれば桜川波の花こそまなくよすらめ

はなのちりうかむ時こそさくら川なるべけれ、花のちりはてたらんには、波のはなこそさくら川とはいふべけれとなり。春辺はきしうつなみも一ふ口ふゑにしありと也。」(上12オ)

23 続千載 山城 桂里 権中納言公雄

露霜のそめぬ色さへまさりけりかつらの里の秋の夜の月

かつらのさとは、月の名所。いまだはつ秋の比なれば、くさ木の色もみぢならねど、月のゑにしにもみぢけるとみ侍る也。かつらのさとは、月のゑんなれば、一しほのおもひ出なりと、けうをもよふせり。しものたてつゆのぬきの心ちし侍り。」(上13オ)

24 新統古今 丹後 懸湊 津守国量

霜さむき芦のかれ葉はおれふしていづらがけのみなと成らん

あしのかればむしものふりつみたるをみれば、おのづからさむさ

をおぼゆるなり。さあるほどに、がけのみなどのふうけいもみわかぬとなり。霜にこゝろをうつしたる也。さなきだにさむきに霜のあけほの口ごとくもなり。」(上13ウ)

25 新統古今 大和 初瀬寺 権大納言通守

きかたゞあらましものをけふの日も初せの寺の入相のかね

此うたのこゝろは、ひるのうちは、ものに満されてなに心もなきに、はつせの寺のかねをきゝつけたれば、にわかにものおもひがましたり。」(下1オ)

26 続拾遺 山城 石清水 権中納言長方

神がきや代々に絶せぬ石清水月も久しきかげやすむらん

神祇のうたなれば、代々に絶せぬとよめり。月も久しきといへば、作意おもしろし。神慮はゞかりていとゞみやしやかにきこへ侍り。」(下1ウ)

27 続後拾遺 津国 生田森 雅経

津の国の生田のおくの秋風にしかのねなるゝもりの下露

秋は、さなきだにもあはれなるに、ことさらしかのなくねなどをきゝてはかなしきものなれど、われはしづ山がつにすみなれて、さもなしと、これもしゆつくわいをふくみたり。」(下2オ)

28 新後撰 山城 音羽瀧 有家

名にたてる音羽のたきもおとにのみきくより袖はぬるゝものかは

われもおもふ中は、うき名のたちて、あふ事ならざるは、此おとわのなにたちて、それほ口むもなき瀧かな口む、わが身の上におもひ

あはせたれば、袖のかはくまもなしとぞ。」(下2ウ)

29 拾遺集 近江 竹生嶋 法橋観教

水海に秋の山辺をうつしてははたばりひろきにしきとぞみる

秋のもみちを水海にうつしては、木ずへ庭二たび花のさかり哉と
よみしごとく、ちくぶじまのけい、水うみのけい、いふもおろか
なり。さある程に、はたばりひろきにしきのごとく、水そこまで
かざやくなり。」(下3才)

30 新古今 伊勢 神路山 西行法師

神路山月さやかなるちかひありてあめの下をばてらすなりけり

いせの国は、あまてるおをんかみのすみ給へば、神路山にてる月
こそあめが下をてらすらんと、神意を祝したり。神祇の哥にはか
なひ侍りといひつたへたり。」(下3ウ)

31 新後拾遺 山城 戸難瀬瀧 儀同三司

となせ川山もひとつのもみぢ葉に染て残らぬたきのしら糸

となせのたきに、山のもみぢをうつしては、なべてのにしきとみ
ゆるとなり。たきの白糸も、今は引かへたり。おもしろさもまさ
りてみゆるなり。」(下4才)

32 新古今 筑前 生松原 枇杷皇太后宮

涼しさはいきの松原まさるともそふる扇のかげなわすれそ

餞別の哥なり。今この松原のすゞしきは、まして納涼の所もあり
なんほだにわするべし。されども、かたみのあふぎをわすれ給ふ
な、わすれもわすれもしきと也。」(下4ウ)

33 新古今 山城 野宮 源順

たのもしな野宮人のうふるきく時雨る、秋にあへず成とも

野の宮は、みやす所のすみ給ひし所也。今みれば、すみあらして、
いにしへのありさまはみへざれども、きくばかり郁々として、い
にしへも今もかわらぬ程に、秋にもならばまたこそしたひきてん
とおもひいれふかし。」(下5才)

34 新統古今 近江 老曾杜 兼好法師

のがれえぬ老曾の松のもみぢばはちりかひくもるかひなかりけり

おひそのもりといへば、たかをもみぢとはひきかへて、ゑにし
もしらぬながめをすると、身のうへにおもひあわせて、しゆつく
わいの心をふくめり。」(下5ウ)

35 新後拾遺 大和 龍田 柿本人丸

朝まだき我打こゆるたつた山ふかくもみゆる松のいろ哉

たつた山は、もみぢのめい所にて、みな人もみぢばかりをながめ、
えならぬやうよみなして、今みるまつのゑにしを、たれにもこゝ
ろのつかぬはあさましき事かなとなり。まことに、まつのたちな
らびたるをながむれば、もみぢにまされりとみる人もあり。」(下
6才)

36 新古今 駿河 田子浦 越前

沖つ風夜さむになれやたこの浦のあまのもしほ火たきまさるらん

おきつかぜ、はげしくふきてよさむになれば、あまのもしほ火も
たきまさるらんと、あはれにおもほゆるとなり。仁愛のみちにか

なひたる哥なり。」(下6ウ)

37 続古今 津国 布引の瀧 従三位行能

五月雨に水の水上すみやらでさらすかひなき布引の瀧

五月雨にみなかみにごりて、たきのいともゑにしすくなし。さある程に、さらすかひなきとぬのにゑんをむすびたり。水上のすみたる時はおもひやらるゝとなり。」(下7オ)

38 風雅集 山城 稻荷山 源三位頼政

いなり山西にや月の成ぬらん杉の庵のまどのしらめる

いなり山は、杉の名所あり。その西にかたむく□の木のまよりな
かむれば、あけほのゝごとくおもしろきと也。teriもせずくもり
もはてぬはるのよのおぼる月よにしく物はなしと同じ也けり。」
(下7ウ)

39 金葉集 伊勢 鈴鹿 六条右大臣北方

はやくよりのみ渡りしすゞか川思ふことなる音ぞきこゆる

わがたのみをかけしあらし、しんりよにかなひたればこそ、此
すゞかの川をわたりもはてぬに、そのしるしあるとなり。まこと
に、やうせいすいせんまでみなかみのちかひにもれぬとなり。」(下
8オ)

40 新続古今 山城 淀 左近中将定親

五月雨に淀の河岸みづこへてあらぬわたりに舟よばふらし

□水のみなぎりわたりしを、さみだれとみなしたり。さあるほど
にわた□にもあらぬところを、あなたこなたと舟よばひするとな

り。うきにあはぬと□ゆつくわいのころ□□くなり。」(下8ウ)

41 新拾遺 山城 款冬瀨 西園寺入道

ちりはつる山吹のせに行春の花にさほさすうちの川長

暮春のころ、やまぶきのせは、ちる花水上にみてり。ことに、や
まぶきもさかりなれば、はるのくれゆくは、このところにぞとま
るらんと、はなに心をもたせたいとおもしろし。」(下9オ)

42 新続古今 参川 八橋 堀川院中宮上総

八橋を行人ごとにとひみばやくもでにたれをこひわたるぞと

この八はしのけいきに、りよかうのうきをわすれたるに、くもで
にものおもふとは、いかなるいはれにや。そのあらましをしら
ねば、ゆきゝの人にとひみばやとなり。」(下9ウ)

43 続後拾遺 近江 唐崎 法眼玄全

からさきやさゞ浪ながらよる舟を神代にかへす松風ぞふく

さ□波ながらよるふねは、ものわびしきありさまなり。まことに、
いにしへとは、ひ□□かへたるありさまかな。されども、まつか
ぜのおとはかみよにわからぬとなり。さゞ波やしがの都はあれに
しをむかしながらのやまざくらかなと同じ。」(下10オ)

44 続後撰 山城 鳥羽 後鳥羽院

くもるとぶかりの羽風に月さへて鳥羽田の里に衣うつなり

月のくもるとぶかりの羽かぜに、いかやうにおぼしめさるゝとな
り。さある程に、たゞにてきこえぬきぬたのおともき□しめさるゝ
となり。とをくうつきぬたのおとのきこゆるは、月のくもる□み

たなり□□□同じ□□□るべし。」(下10ウ)

45 新統古今 播磨 賀古湊 津守園豊

さしのぼるがこのみなとの夕しほに松原こしてちどりなくなり

がこのみなとのゆふしほには、ちどりさへすみわびて、松原こえてなくなり。いはんや、人としてかゝるわびしきすまのおもひやられてありとおんあひの心ふかし。」(下11才)

46 千載集 山城 嵐山 俊恵法師

けふみれば嵐の山は大井川もみぢふきおろす名にこそありけれ

あらしの山はなのみにてありつるが、今、大井川のもみちをみて、まことの風をしりぬとなり。いかだしよまでこととはんとよみに、此ころなるべし。」(下11ウ)

47 新拾遺 近江 逢坂 前中納言有忠

みやこをば夜ぶかく出てあふ坂のせきにまたるゝ鳥のこゑかな

みやこをばよぶかにいづれど、あふさかのせきにてとりのこゑをきくは、いかばかりものうきなりと、我思ふ事のかなはねば、しゆくわいのあまりにかくよみ侍り。」(下12才)

48 千載集 丹後 天橋立 赤染右門

おもふ事なくてやみましょさのうみのあまの橋だて都なりせば

身のうへにおもふ事なくて、よさのうみをながめむには、いかばかりゑにしあらんと、わがもの思ひのつらさをのべたり。つみなくしてはい所の月をみんなにはといひしも、このころなるべし。またこのゑにしをみやこにうつして見たきとなり。」(下12ウ)

49 金葉集 山城 小野 皇后宮権大夫(へ師時)

炭がまにたつけぶりさへ小野山は雪げの雲とみゆるなりけり

すみがまのけぶりとしりながら、ゆきげのくもにみまがふあまり、さむさにぜひをわすれ給ふなり。作意いとおもしろし。此哥は、しゆつくわいの哥と聞え侍り。おもひさだめても、またすてがたきは心なりけりとあらまし聞え侍り。」(下13才)

50 続後撰 陸奥 千賀塩竈 山口女王

我が思ふ心もしるくみちのくのちがのしほがまちか付にけり

君を思ふころはちがのしほがま、みをこがすとなり。かくつけまいらせたく侍れども、うちつけにもいはれぬとなり。女の哥に、ころふかくていとあは^わ□□きこへ侍り。思ふともきみはしらじなわきかへり岩もる水の色しみえねばと心□^おなじ。」(下13ウ)

51 新勅撰 淡路 繪嶋 後徳大寺左大臣

みなとやまどことはにふくしほ風に急鳴の松は浪やかくらん

そのけい、かくれなきめい所なり。名にしおはば、みなとやまよりふくしほかぜかきつらんと、心なきしほ風をおもひいでしきくい、ふうりうにしておもしろし。」(下14才)

52 新勅撰 豊前 門司関 入道前大政大臣

春秋の雲井のかりもとゞまらずたが玉章のもじのせきもり

そぶがいにしへをおもひいでたり。さあらば、はるあきのかりもとゞまるべきか。さもあらねば、たれ人のたまづさをとめけるにやと、そのいはれきかまほし。」(下14ウ)

大
王
可

七
六
五
四
三
二
一

上・1才

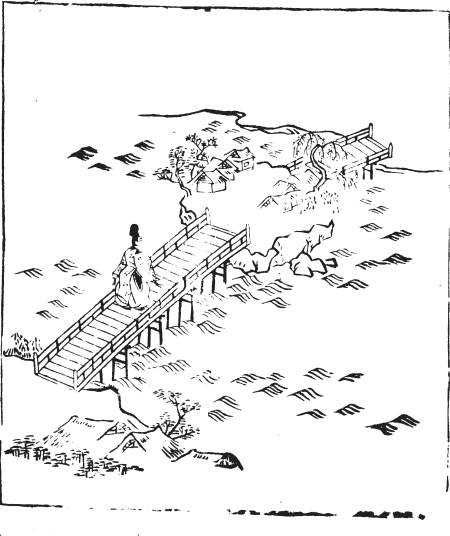
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

上・1ウ



上・2才

新儀橋 (石)
 舟家
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り



上・5才

新儀橋 (石)
 舟家
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り



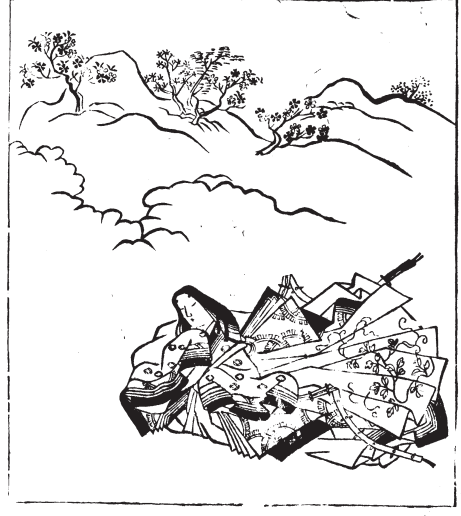
上・4ウ

新儀橋 (石)
 舟家
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り



上・6才

新儀橋 (石)
 舟家
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り
 舟り



上・5ウ



上・7才



上・6ウ



上・8才



上・7ウ



上・9才



上・8ウ

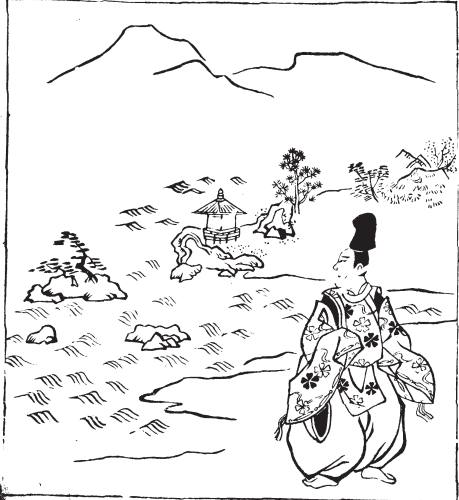


上・10才



上・9ウ

御茶の味を
 木の葉
 入念に思ふ
 秋の風
 かなしみ
 まのけ
 山嵐
 雨の音
 水鏡



上・11才

御茶の味を
 木の葉
 入念に思ふ
 秋の風
 かなしみ
 まのけ
 山嵐
 雨の音
 水鏡



上・10ウ

御茶の味を
 木の葉
 入念に思ふ
 秋の風
 かなしみ
 まのけ
 山嵐
 雨の音
 水鏡



上・12才

御茶の味を
 木の葉
 入念に思ふ
 秋の風
 かなしみ
 まのけ
 山嵐
 雨の音
 水鏡



上・11ウ

秋の夜更け
 月影の
 照らす
 庭の
 木立
 影の
 長く
 伸び
 影の
 長く
 伸び
 影の
 長く
 伸び



下・1才



鏡の
 影の
 長く
 伸び
 影の
 長く
 伸び
 影の
 長く
 伸び



下・2才

鏡の
 影の
 長く
 伸び
 影の
 長く
 伸び
 影の
 長く
 伸び



下・1ウ

拾遺集 卷之七
作人 白居易
昔者 杜牧
あふみ 柳公権
さき 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原



下・3才

新撰 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原



下・2ウ

新撰 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原



下・4才

新撰 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原
あふみ 菅原



下・3ウ

性不 清画
 布の形
 遊屋
 大月
 おのゝ
 すまはて
 うひら
 布の
 布の



下・7オ

形不 清画
 田舎
 神は凡
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心



下・6ウ

木葉集 像
 水原 景行
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心



下・8オ

木葉集 像
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心
 春の心



下・7ウ



下・9オ



下・8ウ



下・10オ



下・9ウ



下・11オ



下・10ウ



下・12オ



下・11ウ

子夜清夜
 月影如霜
 露滴芭蕉
 虫鸣唧唧
 此情此景
 最感凄凉
 独坐窗前
 思君如故
 一夜无眠
 泪湿罗裳
 小夜曲
 白居易
 秋夜曲
 丁巳年
 某某
 画



下・13才

子夜清夜
 月影如霜
 露滴芭蕉
 虫鸣唧唧
 此情此景
 最感凄凉
 独坐窗前
 思君如故
 一夜无眠
 泪湿罗裳
 小夜曲
 白居易
 秋夜曲
 丁巳年
 某某
 画



下・12ウ

子夜清夜
 月影如霜
 露滴芭蕉
 虫鸣唧唧
 此情此景
 最感凄凉
 独坐窗前
 思君如故
 一夜无眠
 泪湿罗裳
 小夜曲
 白居易
 秋夜曲
 丁巳年
 某某
 画

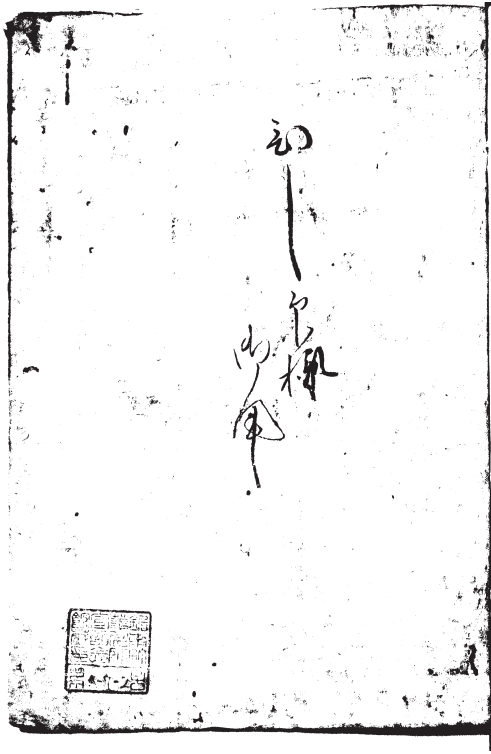


下・14才

子夜清夜
 月影如霜
 露滴芭蕉
 虫鸣唧唧
 此情此景
 最感凄凉
 独坐窗前
 思君如故
 一夜无眠
 泪湿罗裳
 小夜曲
 白居易
 秋夜曲
 丁巳年
 某某
 画



下・13ウ



下・14ウ